

(国語)

「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実を実現する姿を探求する」

—国語科(読むこと)の学習を通して—

大阪市立加島小学校

1. 研究主題設定の理由

本校では、学校教育目標を「人権尊重の教育を基盤とし、確かな学力と豊かな人間性をもった子どもを育てる」に設定し、子どもたちが自己肯定感・自己有用感を高めるよう、日々の教育活動を展開している。

本校の児童の現状と課題を考えると、学力面については、厳しさを伴う状況にあると捉えている。令和5年度全国学力・学習状況調査における「学力に課題の見られる児童の割合」については、53.2%であり、一斉授業の中で、集中して意欲的に学びに取り組むことに課題を抱える児童が一定数存在している。そこで、昨年度から、研究主題を「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実を実現する姿を探求する」とし、さらに「国語科(読むこと)の学習を通して」を副題として、学力に課題の見られる児童を含めた全員の児童が、集中して意欲的に学びに取り組める授業改善を模索していくという研究を進めてきた。

2. 研究の趣旨

学力に課題の見られる児童の中には、学習内容が理解できずに、そもそも学習活動に参加することを諦めてしまう児童もいる。そのような児童に内容の水準を合わせて授業内容を調整すると、一方で理解の習熟が高い児童が浮きこぼれの状態に陥ることもある。学力に課題の見られる児童を含めた全員の児童が、集中して意欲的に学びに取り組める学習を進めていくために、令和3年中央教育審議会答申「令和の日本型学校教育の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」(令和3年1月26日)において提言されていた「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」を授業設計の柱とし、本校の実態として、学力テストにおいて特に課題がみられる教科である国語科において、実践を模索してきた。児童一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことや、あるいは、児童の興味関心・キャリア形成の方向性等に応じ児童自身が学習を最適となるよう調整する「個別最適な学び」。また、多様な他者と協働しながら、一人一人の良い点や可能性を活かす「協働的な学び」。これらを一体的に充実させる学習を展開することで、すべての児童が集中して意欲的に学びと向き合う姿を目指してきた。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 個別最適な学びを生み出す授業づくり

- 「個別最適な学び」を理解するための研修を行い、教員の意識の向上を図った。
- 児童の学習進度等にに合わせて、効果的に指導が進められる支援を用意した。

(難易度別のワークシートを用意したり、必要な児童にヒントカードを用意したり、個別の声かけ支援をしたりするなど)

○ 単元を通して実施する「言語活動」と連動させた学習活動の工夫を図った。

（児童が、自分の興味関心等に合わせて、学習活動を選択できるようにし、意欲の喚起をねらった。）

視点② 協働的な学びを生み出す授業づくり

○ 「協働的な学び」を理解するための研修を行い、教員の意識の向上を図った。

○ 意見交流の場を意図的に組織する工夫を図った。

（「フリーミーティング」個別最適な学びを進めている場面では、自由に離席し、必要な人に意見を求めることができる。「自由議論」挙手指名方式ではなく、発言した児童が次に考えを聞きたい児童を直接指名し、発表をつないでいく。）

○ 重点的指導項目については、個別の学習ではなく、全体の交流の中で学習を進めていく協働学習によって、理解の促進を図った。

4. 研究の成果と今後の課題

（1）研究の成果

○ 各学年とも、「教師から指示」されるのではなく、自分の興味や関心に合わせて、学習の方法等を選択しながら進めていくやり方には、児童の意欲を喚起する効果を確認できた。学力に課題の見られる児童に、一定程度、授業参加を促すことができた。

○ 学習意欲の向上が、学習理解の促進へと繋がった。当該単元の「単元テスト」において、点数の平均値が、その単元以前の平均値を上回った。

○ 「個別最適な学びと協働的な学び」が「主体的・対話的で深い学び」の実現に働きかける効果を確認することができた。いくつかの場面において、バラバラだった知識が結びついたり、既習内容を新規の学習場面で活用するなどの「深い学び」が生まれた。

（2）今後の課題

○ 「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」を目指すための授業づくりは、困難を伴うものだった。「果たしてこれでいいのだろうか。」と模索を続けながら実践を進めた。研鑽を重ね、授業の精度を高めていく必要がある。

○ 今回の実践においては、「教師が用意した選択肢から児童が自分の興味に合わせて選ぶ」活動が多かったが、今後は、児童自身が選択肢そのものを自ら考えられるような流れの学習へと発展させていきたい。

○ 「必要な時に、必要な（多様な）相手と」協働的な学びが実施できる授業展開をさらに模索することや、そういった意識そのものを児童が常に考えられるような、児童の意識の変革を目指す。

○ 今回の実践が不十分だった児童に対して、引き続き有効な手立てを模索すること。彼らが学習に意欲的に向き合える学習展開を模索し続けたい。